美少女戦士

セーラームーン

読んでみた

～本の読み方いろいろ

いまのまさし

「セーラームーン」読んでみた

～本の読み方いろいろ

いまのまさし

目次

はじめに……1
どんなマンガなの？……1
物語は……3
古典からの影響……4
恋愛マンガ……6
ことば……7
セーラームーンが描いていること……8
■セクシャリティ……8
■コメディ……10
■成　長……11
■排除と承認……12
■戦争と平和……13
■愛と正義……16
■そしてさらに……18
「セーラームーン」が残したもの……19
新たなる古典へ……20
第2版へのあとがき……24

はじめに

皆さんはマンガをどうやって読んでいますか。寝転がって？　いや、そういうことじゃなくて…　どういうところに注目して読まれるでしょうか。まあ、マンガを読むのに「どう」とか「こう」とか考えないよ、という人が大半でしょうけれど、いろいろ角度を変えて見るとマンガもなかなか奥深いところが出てきます。もちろんそれはマンガに限らず、小説でも映画でも、ニュース解説や論文でも同じです。別にわざわざ難しくする必要もありませんが、ちょっと角度を変えてみるといろいろ新しい発見があったりして面白い、という話を少し書いてみようと思います。

どんなマンガなの？

ということで、試しに図書室にも置いてある「美少女戦士セーラームーン」を読んでみようと思います。「セーラームーン」知ってますよね？　マンガを読んだことが無くてもアニメで見たとか、名前だけは知っているという人も多いかもしれません。

この作品は女子小中学生向け雑誌「なかよし」の一九九二年二月号（実質発売日は一月初旬？）で連載が開始され、一九九七年三月号までの五年間にわたって掲載されました。作者は少女漫画家の武内直子。「セーラームーン」は大ヒットして武内の代表作になったばかりでなく、世界中で出版され日本を代表するマンガのひとつになりました。

ただこのヒットはマンガ単独のものと言うより、アニメのヒットが原作のヒットにつながったとも言えます。アニメは連載開始から二ヶ月遅れで放送が開始され、雑誌連載とほぼ同じ期間続きました。つまりマンガとアニメの企画はほとんど同時に始まり、連動・連携しながら作られていったのです。今風に言えばメディアミックスですが、こうしたやり方はかなり昔から、そして今でもよく行われています。テレビと雑誌の相互作用で売り上げを伸ばす作戦ですね。武内は仕事量の関係から当然アニメに直接関わることは出

来ず、アニメはアニメの制作陣がアニメ独自の部分を多く含んだ形で作られていきました。このため、マンガは「原作」という位置づけになっていますが、必ずしもアニメと内容が一致しているわけではありません。セーラームーンの必殺技はマンガでは「ムーンフリスビー」ですがアニメ版では「ムーンティアラアクション」です。まあこれは商標登録問題という「大人の事情」によるものでしかありませんが……。一番大きな違いは作品全体のニュアンスでしょう。アニメ版はどちらかと言うとコメディタッチが強いのですが、マンガの方は第一巻を除けば全体的にはシリアスタッチです。武内はマンガ単行本の本編の合間で時折そのことについての不満を漏らしています。蛇足ですが、二十周年記念として昨年（二〇一四年）新たに制作されたアニメ「美少女戦士セーラームーンＣｒｙｓｔａｌ」は、原作に近い形でリメイクされました。

マンガは連載中ほぼ一年毎にひとつの物語が完結しています。おそらくアニメの放送形態に合わせたのでしょう。アニメの方はご存じの方も多いと思いますが、一年目が「美少女戦士セーラームーン」、二年目が「セーラームーンＲ」、三年目が「～Ｓ」、以降「～ＳｕｐｅｒＳ」、「～セーラースターズ」として作られました。基本的な物語の設定と展開は平行して描かれていたマンガとだいたい同じです。オリジナルのマンガは単行本全十八巻（現在は加筆修正された新装版十二巻、完全版十巻として再刊行されている）という長大な物で、図書室には旧版の十巻までがそろっているようです。

今回はとてもその全てについて触れることは出来ませんので、アニメ版の第一期に相当する「ダーク・キングダム編」を中心に見ていきたいと思います。なお、まだ読んでおられない方もいらっしゃると思いますので、あまり「ネタバレ」にならないように書きたいと思いますが、そのため若干わかりづらいところもあるかもしれません。その時には、ぜひ図書室の蔵書で直接本作をお読みいただければと思います。

物語は……

とは言え、全く物語に触れないわけにもいきませんので、まず簡単に書いておきましょう。「ダーク・キングダム編」は単行本第一巻から第四巻の半ばにかけて展開します。主人公は中学二年生の月野うさぎ。東京都港区にとてもよく似たＴＯＫＹＯという街に住む、明るいけれど遅刻常習犯でちょっと泣き虫の女の子です。そのうさぎが人間の言葉をしゃべる黒猫のルナと出会うところからお話が始まります。ルナは、うさぎには託された使命があり、仲間を集めて敵を倒し、自分たちのプリンセスを探し出さなくてはならないと告げます。ルナから不思議なブローチをプレゼントされたうさぎは、スーパーヒーロー（ヒロイン？）であるセーラームーンに変身できるようになります。

なぜうさぎに、そして誰から使命が与えられたのか、仲間は集まるのか、プリンセスは見つかるのか。敵とは何者なのか。敵に勝利できるのか。そして運命的に出会った高校生の地場衛（ちばまもる）や、いつもピンチを救ってくれる正体不明のタキシード仮面との恋の行方は？　はるかな時空間を舞台に壮大な愛と戦いの物語が綴られていきます。

いま読んでもそんなに違和感はありませんが、やはり二十年前のマンガなので随所に古さを感じさせるところはあります。パソコンが出て来ますが、まだマウスがありません。ディスクと呼ばれているものは３・５インチのフロッピーディスク（知ってます？）です。パソコン通信という言葉が出て来ますけれど、これはインターネットの会員制掲示板のようなものなのですが、この当時はまだインターネット自体が普及していませんでした。携帯電話もまだ誰も持っていませんね。そう言えば「ダーク・キングダム編」の後の展開になりますが、「セーラームーン」の作品世界では二〇一〇年代の地球は新たな王国の時代に入っており、人々はほとんど歳をとることなく平和に暮らしていることになっています。さすがに二十年後のことまで考えてマンガは描けませんね。まあ「つっこみどころ」を探すのも一種の「角度を変えてみる」ことのひとつで

はあります。

古典からの影響

さて、この作品がどのように生まれたのか、そしてなぜそれが多くの人の心を捉えたのかを考えてみましょう。そこに「セーラームーン」を読み解く最初のポイントがあると思います。

作者の武内直子自身は「美少女仮面ポワトリン」と「スーパー戦隊シリーズ」に影響を受けたと語っているそうです。これらは一九七〇年代から八〇年代の変身ヒーロー（ヒロイン）物のテレビドラマで、仮面をつけた魔法少女（マンガのセーラームーンは一応アイマスクをしている）とか、それぞれのシンボルカラーを持った五人の超人戦士という設定は確かによく似ています。ちなみにどちらも原作・原案は石ノ森章太郎でした。またさらに調べていけば、これらの作品もそれに先行する「好き好き魔女先生」とか「仮面ライダー」「サイボーグ００９」などにその原型を見つけることが出来そうです。

ただ、「セーラームーン」が「ポワトリン」とか「スーパー戦隊」から主に外見のデザインや変身などの設定上で大きな影響を受けたのは事実としても、しかし「セーラームーン」の物語に影響を与えたものはそれだけではなさそうです。

たとえば後半のひとつのクライマックスとして、セーラー戦士たちが月の遺跡で石に刺さった剣を引き抜くというシーンがあります。これはすぐにイギリスのアーサー王伝説を思い出させます。また最終盤でセーラームーンが力を使い果たして死んだかのように見えたとき、王子のキスで目覚めるシーンがありますが、これは「眠りの森の美女」に似ています。これらはそれぞれワンシーンですが、「セーラームーン」全体を見てもそこに様々な古典の影響、もしくは引用を見ることができます。

まず月のお姫様が地上に生まれ変わってくるという設定がありますが、これは日本最古の物語と言われる「竹取物語」＝「かぐや姫」をモチーフにしていま

す。もともと高貴な人物が何らかの原因で地位を失い、放浪しながら（「セーラームーン」で言えば前世で死に追いやられ、現世でただの庶民として生まれ変わって）、苦労を重ねていく物語は貴種流離譚と呼ばれる古典文学や伝説の一つのパターンです。姫と勇士たちの転生と再会、リベンジという設定は江戸時代の大河小説「南総里見八犬伝」そっくりと言えるでしょう。もっと大きく見れば、そもそも勧善懲悪は最も典型的な古典的展開であり、王子と姫、青年と少女のラブロマンスとその果ての悲劇は、古代ギリシアからシェークスピア、さらには日本の浄瑠璃心中物にも通じるオーソドックスなストーリーです。

また「月にかわっておしおきよ」という有名な台詞があります。こういういわゆる「決めぜりふ」とか「決めポーズ」というのはアニメやドラマの「お約束」ですが、しかしこれも考えてみれば歌舞伎の見得からの影響と言えるのではないでしょうか。もっともこの傾向はいろいろな制約が多くシーンの使い回しをしなくてはならなかったアニメ版の方にとりわけ顕著でしたが。

このように「セーラームーン」は大昔から人々が継承してきた古典的要素を集めて作られていると言っても過言ではありません。これは否定的に言っているのではなく、そうした人類共通の文化的遺産を基盤にした物語だからこそ、多くの人に理解されるのだということです。これはたとえば大ヒットしたＳＦ映画「スターウォーズ」も全く同じでした。最近はよく「パクリ」という言い方がされますが、古典の引用や流用は別にパクリ＝盗作ではありません。人類の文化は継承によって成立しています。先人の文化的成果を受け取り、それを消化して自分の作品の中に再生させていく、実はそれ以外に新たな創造をする道はないのです。そしてその過程の中からしか新しい価値観は生まれません。言葉が無かったら小説は書けませんが、その言葉は必ず長い歴史の中で形成されてきたもののはずです。新しい価値観の小説だから古くから継承されてきた言語は一切使わないのだと言ったら、その小説は誰にも読めず、従って何の意味も持ち得ず、結

果として小説としては成立しません。文化というのはそういうものなのです。

恋愛マンガ

またもう少し視点を変えてみると、このマンガは言うまでもなく少女マンガです。ぼくたちには当たり前のことなのでことさら気にはなりませんが、日本の少女マンガは独自の進化を遂げた独特の形式を持っています。「セーラームーン」はこの面からもマンガ表現文化の中の古典的形式を継承していると言えます。テーマの性質上、コアな少女マンガに見られる感覚的・詩的で抽象的な表現から比べればはるかに散文的・論理的でわかりやすいのですが、それでも「王子様」との偶然の出会い、最初はケンカから始まる流れ、しかし最後までつながる運命の赤い糸という、まさに王道のラブコメ（ラブロマンス）形式がしっかり守られています。あえて批判すればそれは、ありきたりで面白みがない陳腐な展開とも言えますが、少女マンガだから許されるこのような標準的フォーマット（型）に組み込まれているからこそ、物語全体がまとまるのだとも言えるでしょう。

絵柄についても、基本的に可愛くきれいに描くという少女マンガの伝統的表現手法が使われることによって、暴力的であったりグロテスクであったりする物語を中和する効果が出ていると思います。またこれは作者の嗜好にも関わっているようですが、この作品には全編に宝飾品があふれています。最初の事件が宝石店から始まるところからして象徴的ですが、セーラームーン物語の全てを貫く基軸も「幻の銀水晶」と呼ばれる巨大な力を持つ宝石の争奪戦なのです。セーラームーンは変身するとジュエリー満載のアクセサリーをたくさん身につけます。ブローチやティアラ、宝飾された変身ペンなど、少年マンガではなかなか思いつかない華麗さが目立ちます（「聖闘士星矢」を除く？—笑）。

ことば

宝石ということで言えば、これは本編にそのまま描かれていることですが（3巻P60）、登場人物のジェダイト、ネフライト、ゾイサイト、クンツァイトなどは、みな宝石の名前です。ここにまた別の楽しみ方が出て来ました。作中の言葉に注目する視点です。

「セーラームーン」には多くの人物やアイテムが登場します。とくに何も説明されていませんが、実はそれぞれに何らかの意味を持った名前がつけられているケースがけっこうあります。ジェダイトたちは敵方であるダーク・キングダムの幹部ですが、その繋がりでいえば首領であるクイン・ベリルのベリルも緑柱石という鉱物の名前であり、彼女が仕える悪魔クイン・メタリアの名前はメタル＝金属からとられています。もちろんこれだけだと、ああそうなのかで終わってしまいますが、実は宝石には「石言葉」というものがあります。たとえばネフライトには「成熟の魅力・知恵とやすらぎ・高貴・精神・幸運・富・道徳・名誉」などという意味があるそうです。「セーラームーン」の中では人物のネフライトについて、さほど多くのことは書かれていませんが、もしかすると作者はこうした石言葉などに暗にネフライトの人物像を象徴させているのかもしれません。こうして読み込んでいくことによって、作品の行間（マンガだからコマ間？）に隠されている世界を広げていくことが出来るのです。ちなみに緑柱石はその中に含まれる微妙な成分の違いで様々な宝石になる石だそうで、こうしたところにも、もしかするとクイン・ベリルという人物の意味を探る手がかりがあるかもしれません。

同じように月野うさぎという名前は本編にも書かれているとおり（3巻P18）「月の兎」の意味ですし、地場衛には「地球という場所を守る者」という意味が込められているのでしょう。他にも登場人物に使われている「火」「水」「木」などの文字は、火星、水星、木星を表すとともに、それぞれの漢字が表す物質的イメージや色のイメージにつながっていきます。それはさらにマーズ、マーキュリー、ジュピターとい

うギリシア神話の神々のイメージともつながるのです。こうしたイメージが各人物の性格や存在意義を象徴していると考えられます。

こんな風にして、たとえば、セレニティ（ギリシア神話の女神セレーネ）、エンディミオン、アルテミスなどを調べてみると、彼らの意外な関係（？）が明らかになるかもしれません。またなぜ愛野美奈子の名前の中に「愛」と「美」が入っているのか、調べればすぐわかりますよね。

このようにして言葉に着目して作品を読んでいくと、物語の背景が大きく膨らみます。もちろんそれを作者が実際に意図しているかどうかはわかりませんが、しかし作品というものはいったん発表されてしまえば作者の手を離れて読者（鑑賞者）のものになるのです。自由に作品を解釈していくことも、マンガを（だけではなく芸術作品全般において）鑑賞する楽しみのひとつです。先に書いた古典からの引用の問題とも重なりますが、言葉には歴史が作り出したイメージが込められており、さらに「セーラームーン」ではその言葉が重層的に使われています。それは登場人物が変身したり、時空を超えて転生したりしていることとも大きく関わっているのですが、見方を変えてみれば、ひとりの登場人物が単純な存在ではなく複雑で多様な面を持っているということを暗示していると捉えることも出来るでしょう。

「セーラームーン」の中に隠されている古典や言葉の意味を探っていけば、作品は本に直接書かれていることだけに留まらず外側にどんどん広がっていき、あなただけのセーラームーン物語が生まれてくるかもしれません。逆にこの作品から出発して古典へ戻って読んでみたら、あなた自身の世界がぐっと広がっていくかもしれません。

セーラームーンが描いていること

■セクシャリティ

さてここまで、作品を形作る要素を探って古典からの引用や言葉の意味ということについて考えてみました。ここからは作品自体が訴えていること、表現し

ていることについて考えてみたいと思います。

まずこの作品で一番目立つ特徴はセーラー服ですね。なにしろ自分で「愛と正義のセーラー服美少女戦士」と名乗っているのですから。ぼくはこの作品が「セーラー服」とそれに象徴される少女、さらには女性全般の意識の変化を生むひとつのきっかけだったのではないかと思っています。

もちろん例外もあると思いますが、「セーラームーン」以前のマンガやアニメに登場する普通のセーラー服は、真面目とか野暮ったい（ダサい）イメージか、逆にいやらしい作品に使われるイメージがありました。良くも悪くも「普通」の象徴だったのです。七〇年代に「スケバン刑事」というセーラー服少女が大活躍するマンガがありましたが、ここでのセーラー服の扱われ方も特別なものと言うより、「普通」の中に紛れこむというイメージでした。

ところが「セーラームーン」ではそのセーラー服が戦闘用コスチュームとしてカッコ良く描かれたのです。もちろんそれは普通のセーラー服ではありませんが、通常のうさぎのセーラー服姿とそんなに違っているわけでもありません。と言うより、スカートがミニになって、アクセサリーがふんだんに使われ、足元はブーツやハイヒールと、まるでセーラー服のおしゃれコーディネイト版と言ってよいデザインなのです。言ってみればプチ変身です。「普通」の女の子でもちょっとお洒落することでスーパーヒーロー（ヒロイン？）になれるというメッセージだと捉えることも出来るかもしれません。

またこのスタイルはセクシーと言えると思いますが、ぼくはそもそも「セーラームーン」が「セクシー」という言葉の意味そのものも変えてしまったのではないかと考えています。「いやらしい作品に使われるイメージ」があると書きましたが、一九七〇年代にはまだ「セクシー」にはイコール「いやらしい」というニュアンスがありました。マンガではありませんが、八〇年代の女子高生ユニットおニャン子クラブの「セーラー服を脱がさないで」という歌が、週刊誌で「年端もいかない少女に淫行同様の内容の歌を歌わせてい

る」と批判されたそうです（日本語版ウィキペディア）。セーラー服と「セクシー」の関係性について示唆的なエピソードだと思います。そしてこうしたことの背景には、「女性は男性に従属する性である」という根強く残る古い通念の存在がありました。つまり女性がセクシーであることは男性に媚びることであったのです。女は弱く男に守られる存在であり、そのかわり可愛く愛される存在でなければならない、ということだったのです。けれども「セーラームーン」は逆に弱い男を強い女が能動的に守るという物語です。女の子たちは文字通りの「戦士」になったのです。もっとも、昔から女性が男性を守るというマンガが無かったわけではありません。たとえば「リボンの騎士」とか「ベルサイユのばら」などです。しかし主人公の少女たちはそのためには男装しなくてはなりませんでした。かつてのマンガのヒロインは「セクシー」を捨てることによってしか男を守ることが出来なかったわけです。その点「セーラームーン」は違いました。「セクシー」に変身することによって強い自立的な女性になる、セクシーであることが異性のための行為ではなく、自己主張、自己表現の手段となったとも言えるでしょう。「かっこいいセクシー」の誕生です。これは当時の世界の趨勢とも連動しています。マリリン・モンロー以来のセックスシンボルと言われた歌手のマドンナが筋肉トレーニングをして「マッチョ」化したのも九〇年前後でした。か弱いお姫様から強い女へ、しかもそれが等身大の自分として実現されていく、そうした物語としても「セーラームーン」を読むことが出来るような気がします。

■コメディ

最初の方でこの作品は「第一巻を除けば全体的にはシリアスタッチ」であると指摘しました。一番初めの事件でセーラームーンが使った攻撃技は、なんと泣き声でした。セーラームーンが泣くと超音波が発生してそれで敵をしびれさせるのです。まさに「まんが」ですが、これは次の事件でも使われ、ルナに叱られてしまいます。しかし三話目になると、うさぎは早くも

泣くのをこらえることが出来ようになります。実はセーラームーン物語は主人公の成長物語でもあるのです。そのためにいつまでもドジっ子のうさぎを描いていられなくなり、結果的に当初はあったコメディタッチが薄れてしまったのだと思います。

少し話が脱線しますが、そのコメディ部分を引き受けたのがセーラームーン外伝とも言うべき「コードネームはセーラーV」という作品です。このマンガは「セーラームーン」第一巻の最初のページにちらりと出てくるもうひとりのヒーロー、セーラーVの物語です。はっきり言ってセーラーVはセーラームーンとうり二つです。実際にはこのセーラーVがセーラームーンの原型で、本来ならこちらがアニメ化されるはずだったのですが、またまた「大人の事情」で不可能となり、設定を変更して作られたのがセーラームーンだったのです。「セーラーV」はオリジナル版で全三巻（新装版全二巻、完全版全二巻）ありますが、設定上は月野うさぎがルナと出会う前の（つまりセーラームーンが出現する前の）一年間の物語ということになっています。ただしほとんどの作品はおおよそ「セーラームーン」と平行して書かれています。基本的に一話完結型のカラッとしたコメディで、重苦しくなりがちな「セーラームーン」を補完する形になっています。

■成　長

さて、「ダーク・キングダム編」の中だけでも、うさぎは大きく成長します。「十四歳　中二」だから当然と言えば当然でありますが……。うさぎのパパは中盤あたりで「ときどきうさぎが別人みたいに見えるよ／知らないところでオトナのオンナになってすぐにもいなくなりそうだ」と漏らします。ママは「そんなわけないわっ……／うさぎはいつまでも……あまえっこのウチのむすめよ」と否定し、それをママの膝の上でルナが複雑な表情で聞いています（3巻p11）。

うさぎが成長していく過程は前世の記憶を取り戻すのと同時に進んでいきますが、それは自分が生まれてきた理由、人間として何をするために生きているのかを知る過程であるとも言えます。無邪気に何も考

えないで済んだ子供時代から、何らかの責任を負った大人へと脱皮するその途中にいるのです。その意味で「セーラームーン」は普遍的な成長物語であると言うことが出来るでしょう。

そしてそこには当然ながら苦しみと悩みが生まれます。うさぎは「……あたしって／うさぎとセーラームーンと／……どっちがほんとのあたしなのかしら」（2巻p112）と自問し、衛は「――きみはいったい　だれなんだ!?」（2巻p133）と問います。それは思春期のアイデンティティの揺らぎを表現しているようにも見えます。セーラー服に大人のアクセサリーや靴などを組み合わせたセーラー戦士の戦闘用コスチュームは、ここではその不安定で危うい年頃の象徴にも見えてくるのです。身体(からだ)も心も社会性も、大人になりかけているけれどまだ精神的には子供の部分を強く残している、そうした世代の物語だと言えるのではないでしょうか。

■排除と承認

「ダーク・キングダム編」は、またさらに別の角度の読み方も出来ると思います。それは排除・孤立と承認・包容というテーマです。これは今のイジメ問題にも通じることかもしれません。

うさぎはルナから仲間を集めるように指示されますが、それは最終的にセーラームーンを含めた五人の美少女戦士チーム（セーラーチーム）になります。このうちセーラーヴィーナスだけはちょっと別格なのですが、セーラーマーキュリー、セーラーマーズ、セーラージュピターはうさぎが見つけて仲間にしました。これらの戦士も初めは普通の女子中学生で自分が戦士であることの自覚はありませんでしたが、それぞれに学校や近隣の人たちと距離があって溶け込めないという共通点がありました。みな能力としては他の子より卓越したところを持っているのですが、それだからこそ周りになじめず、周囲から排除されて（ハブられて）しまっています。そして自分もそれでよしとして積極的に周囲に関わろうとしません。孤高の人たち

だったのです。

うさぎにはこうした人たちのような特別な才能が無く（と言うより、どちらかというと劣っている？）いつもそれで悩んでいますが、実はうさぎの持っている最大の能力はこうした疎外され孤立した人たちと融和し、受け入れ、友達になれる能力だったのです。うさぎは、みんなが敬遠している人、自分とは全く違う雰囲気の相手でも臆することなく声をかけ、何か共通点を見つけ出そうとします。それは一見特別な能力に見えませんが、セーラーチームには最も必要な力であったのです。うさぎが受け入れることでその人の力が引き出され、仲間となることによってさらに彼女たちの力は何倍にも強まります。そしてセーラームーンがピンチに陥るとき、セーラーチームは一丸となってパワーを送り、それがセーラームーンをステップアップさせて危機を乗り越えさせてくれます。このことは「セーラームーン」の中でも特に重要なメッセージだと思います。

■戦争と平和

「セーラームーン」には、またもっと社会的と言うべき視点からの読み方もあります。それは憎しみと戦争の問題です。「ダーク・キングダム編」の後半になると、セーラー戦士たちや敵勢力がはるか太古に起きた月と地球の戦争によって死んだ人々の生まれ変わりだということが明らかになります。かつて宇宙規模で大きな破滅が起きたのです。

地球には昔ひとつの統一王国があり、月には大変な長寿を持つ月世界人の王国がありました。月の王国は「地球のマイナスの因子をとりのぞき／地球がプラスの方向へよりよく進化していくのを監視し　たすけること」（3巻p25）を使命としていました。地球の守護者だったのです。ところが太陽から飛び出した「悪魔」が地球人の心を操ったため、人々は扇動者にあおられて月に攻め込むことになってしまい、結果的に月も地球も両方の王国が滅んでしまいました。

確かに地球人の側から見れば余計なお節介、監視なんかされたくねぇよという気持ちになるのも分から

ないではありません。ただこうしてみると月の王国は地球人にとっては神のような存在です。考えようによっては地球人の月王国襲撃は「神殺し」だったと言えるかもしれません。つまりニーチェが「神は死んだ」と言ったように、近代は神の人間への支配を拒絶することによって成立する時代です。「セーラームーン」の前世の物語は人間の神からの解放、人間中心主義の開花を暗示しているのかもしれません。

とは言え、月世界人の生まれ変わりであるセーラームーンに言わせれば「……あたしたちは地球を監視していたわけじゃない／――こんな星を夢見てあこがれてずっと／見守っていたの」と地球への愛を語るのです。月から見る地球を「クリスマスツリーのガラスのかざり玉みたい」と言い、美しくも壊れやすいものを守りたい気持ちを表しています（3巻p32～33）。地球を守ろうとする月世界人とそれを抑圧と感じてしまった地球人の間には悲しい行き違いが生じてしまったようです。そしてそんな事態を生じさせたのは悪魔の力だとされるのですが、これは言ってみれば「宗教」とか「思想」のようなものの比喩なのかもしれません。冷静に考えれば別に憎んだり、争ったりする意味など無いはずなのに、宗教や思想によって物事がねじれて見えてしまうと、ちょっとしたことで戦争や殺し合いに発展してしまう。人々の中に元々あった憧れやねたみのようなものが、一人の扇動者につけこまれ負の方向へ操られてしまう。それは別にこの物語だけの話ではなく、ぼくたちが常日ごろ現実に目の前にしている世界の状況と同じです。ですから「セーラームーン」はそうした現代的問題への警告としても読むことが出来ると思います。

ただここで注目しておくべきなのは、この悪魔＝クイン・メタリアが太陽から生まれてきたという点です。かつて月の王女プリンセス・セレニティは地球を愛し、「――月にはないひろがる音／――ひかる海」（3巻p33）「ほんものの緑や風にこがれ／よく地球へおりたった」（3巻p24）とされています。それではこうした地球の美しく優しい自然は何が作り出したのかと言えば、それは太陽なのです。太陽の光と熱が地

球に大気の流れを作り、雲を発生させ雨を降らせ、多くの生命を生みました。太陽は文字通り母なる太陽であり、そもそも太陽が無ければ地球も月も惑星たちも存在しえません。その太陽から悪魔も生まれたというのです。このことを読み解くならば、宗教や思想は時に暴走してやっかいなことになるけれど、だからと言ってそれがぼくたちと全く関係なく生まれてくるものではなく、それも世界の摂理の中のひとつの現れであると理解しなくてはならない、ということになるのではないでしょうか。作品の中ではクイン・メタリアは妥協の余地のない悪として描かれていますが、作品全体から読み取る限りそんなに単純なものではないはずなのです。

とりあえずこの問題は簡単には論じられないのでいったん宿題にして先に進みます。さて、月―地球戦争は大変恐ろしい事態に発展しました。地球側でただひとり悪魔の思想にも扇動者の言葉にも惑わされず、平和を訴え、月の宮殿前で地球からの軍勢を食い止めようとした地球の第一王子が殺されてしまうのです。扇動者は「王子！　地球をうらぎるのか!? すべては地球の繁栄のためだぞ！」（2巻p151）と王子をなじり、王子の側近たちでさえ「われわれは　いいなりはもうたくさんだ／月の王国のやりかたにはがまんできない／一方的にわれわれを監視するなど！」と反発するのです。王子は孤立してもなお「わからないのか!?　われわれは利用されてるんだぞ！　あいつに！」（2巻p160）と人々に呼びかけますが、もうその声は届きません。

別にこの物語は現実世界に起きた特定の戦争をモデルにしているというわけではないでしょうが、このような戦争遂行派と平和主義者、ナショナリスト（国家主義者）とインターナショナリスト（国際主義者）との対立は世界史上実際にあったし、今もあります。皮肉なことに戦争が回避されたことは歴史上では注目されることが少なく、戦争が起きた場合だけが歴史に大きく書き込まれるために、人々はものを考える時に肯定的であれ否定的であれ（つまり、好戦心からであれ恐怖心からであれ）戦争という手段を最

初に思いついてしまうのです。そしていったん戦争だ！となった時、平和主義は忘れ去られ、切り捨てられてしまいます。この物語で言えば、王子と言えども平和を求めることが裏切りとされてしまうのです。

月―地球戦争を史実上の戦争になぞらえる必要はありませんが、ただ作品の構成上から作者のメッセージは読み取ることが出来ると思います。注目点は攻め込むのが地球軍であり、かつまたそれをいさめ、止めようとするのもまた地球の王子であるという点でしょう。つまりこの物語は地球側から、ぼくたちの側から描かれているということです。H・G・ウェルズの「宇宙戦争」のように一方的にこちら側が攻められるお話ではありません。自分たちの内側に戦争に巻き取られてしまう要素も、またそれを止める要素も存在しているのだ、戦争は誰かの問題ではなく間違いなく自分たちの問題なのだという、難しくいえば自己批判的な視点が存在していると読み解くことが出来るのです。

もうひとつ、戦争には勝者などないというメッセージもこの作品には込められています。自分たちのためだと思って始めた戦争なのに、最後には月どころか地球王国も滅亡してしまうのです。地球はもう一度初めから進化を始めなければならなくなりました。ところがそれでもなお、戦争の芽＝悪魔は滅びることなく復活の日をじっと待っていたのであり、ふとしたことから再び同じ悲劇が繰り返されることになった、というのが「ダーク・キングダム編」の背景の物語です。ぼくたちの内側にも常に戦争の芽が眠っているという警告なのかもしれません。

■愛と正義

セーラームーンのキャッチコピーは「愛と正義のセーラー服美少女戦士」ですが、少なくとも「ダーク・キングダム編」においては、この「正義」というのが少しあいまいな気がします。「愛」の方はたっぷりあるのですが……。前述したように確かに前世の月―地球戦争においては明確な正義の立場がありました。ただそれは残念ながら地球の王子ただひとりだけのも

のでした。月の王国とセーラー戦士の側が「悪」であったとは言いませんが、かと言って彼女たちが正義のために積極的・能動的に活動したという描写もありません。あくまで受動的・被害者的立場に留まっています。

転生した後もセーラームーンたちは能動的に正義ということを考えてはいないようです。ただ敵が襲ってくるからそれを阻止し撃退するということでしかないように見えます。単純な二元論ならそれで良いかもしれません。敵でなければ味方、悪でなければ正義ということになるのですから。もちろん攻めてくるのが悪で守るのが正義という論法もあるかもしれません。しかしセーラー戦士たちも守るために攻めるという戦術を使ったりします。「守るために先に攻める」という理屈が現実にある以上、そこに正義の根拠を求めるのは少し無理がありそうです。とりあえず戦う相手（敵）と味方はある程度はっきりしていますが（本当はそれも少し微妙なところがあるのですが）、悪と正義についてはほとんど何も語られていないような感じがします。

当然ながら正義とは何かを考えるためには、悪とは何かも考えねばなりません。そしてその際には前に述べたように、自分の内なる悪の問題をも考えねばならないのです。実はぼくは「ダーク・キングダム編」以降のセーラームーン物語の中では、その辺について少しずつ深まっていっていると考えています。外側に存在する敵の問題だけでなく、内在的な心の問題、正義を行うとは何なのかといった問題が語られるようになると見ています。その意味ではまだ「ダーク・キングダム編」にはもやもやしたものが残ります。

ただここでもすでに、悪を倒す「力」とは何かというテーマは浮上してきています。正義のために力を使うということがどういうことなのか、ここで結論が出ているとは思いませんが、やはり作者はそこを考えないわけにはいかなかったのではないでしょうか。

セーラームーン物語全巻の中心軸になるストーリーは「幻の銀水晶」争奪戦です。星ひとつを簡単に破壊できるだけのパワーを持つとされる幻の銀水晶を

誰もが狙っています。もちろんセーラームーンも敵を根絶するためには幻の銀水晶のパワーを必要とします。こうしてみると幻の銀水晶はＪ・Ｒ・Ｒ・トールキンの「指輪物語」の中に出てくる「指輪」にも少し似ている気がします。「指輪」の方には持ち主を支配するような悪魔的な力も備わっており、トールキンは否定していますが核兵器の隠喩なのではないかとも言われています。幻の銀水晶にはそうした悪魔性はありませんが、そのパワーは正義の側にも悪の側にも伝わるため、その力を使うことは諸刃の剣でもあります。幻の銀水晶が活性化すると敵の側のパワーも増してしまうのです。そのうえ幻の銀水晶が実体を持つものなのかどうかさえも実ははっきりしませんし、どのようにしたらパワーを発揮し、どのようにしたらコントロール出来るのかもよくわかりません。不安定で不明確で、しかし取扱注意の強い力を持っていることだけは明らかな「何かしら」なのです。いったいそれは何でしょう。それはもしかすると「人の心」なのかもしれません。本編中でも「すべて　あなたの心しだいなの」、そして「強い信念と協調　そして深い愛情／それがないと――悪魔であるあれを消し去ることはできない」（３巻ｐ30）と言われています。戦おうとすればするほど相手側も強く出て来てしまう、しかしそれでも最終的に勝敗を分けるのは、敵と自分とどちらの方がより信念と協調性と愛を持っているかだということなのでしょう。

ただ、太陽からやって来た悪魔と戦う力が幻の銀水晶が放つ月の光であるというのも、考えてみるとなんだか示唆的です。なぜなら月の光とは太陽の反射光だからです。

■そしてさらに

ここまでいくつかの点に注目して「セーラームーン」を読んでみましたが、読む人によってまだまだ様々な注目点が見つかるだろうと思います。たとえば「愛」です。基本的に少女マンガですからラブシーンもたくさん出て来るのですが、「ダーク・キングダム編」だけに限っても様々な愛が交錯しています。作品中では

暗示的にしか描かれませんが、四守護戦士であるセーラー戦士たちとエンディミオン側近であったダーク・キングダム四天王との恋、クイン・ベリルのエンディミオンへの片思いとプリンセス・セレニティへの嫉妬、セーラーチームの友情、もちろんうさぎと衛の時空を超えた愛の葛藤と悲劇も掘り下げればいろいろ思いがけない発見があるかもしれません。

また「ダーク・キングダム編」は運命との闘いの物語でもあります。登場人物たちはみな運命に強く支配されていますが、果たしてそれは打ち破れたのかどうか、そしてそれは何故なのかということを考えるのも面白そうです。

クイーン・セレニティが月―地球戦争の最後の戦いで何を思い何を決断したのかというのも、考え始めれば深いテーマになるかもしれません。

「セーラームーン」が残したもの

「セーラームーン」の作品の中身についていろいろ見てきました。けれども作品の味わい方というのはそこだけには留まらないのです。作品をひとつの社会現象としてその影響を考えてみるのも、またなかなか面白いのです。

「セーラームーン」は（アニメの力も大きいのですが）文化史的な意味で大きな転換点を象徴する作品となっています。たとえば日本のアニメやマンガに興味があるという海外の女性ファンの多くが、最初に興味を持った作品として「セーラームーン」の名前を挙げます。いま政府が経済政策の大きな目玉として押し進めているクールジャパン戦略の一番基盤的なところに「セーラームーン」が存在していると言うことです。またＡＫＢ48などいわゆるアキバ系アイドルもエンターテイメント産業の重要な一角に育っていますが、こうした流れをメジャーにしたのも「セーラームーン」だったような気がします。いわば素人であるアニメの声優陣が劇場に出演して歌を歌ったりトークショーを行ったりして、そこに「オタク」が押しかけるという現象はこのころ始まったような気がします。も

ちろん、いまやオタク文化のど真ん中に存在する「二次元美少女」のブームは「セーラームーン」が元祖です。

「セクシー」の概念の変化について前述しました。直接影響を受けているのかどうかは知りませんが、たとえば「セーラームーン」の連載終了の翌年に十六歳でデビューした米国のブリトニー・スピアーズは、プロモーションビデオの中でまさに学校の制服を「かっこいいセクシー」に着こなして踊りました。今では女子学生のセーラー服や制服は「カワイイ」という言葉とともに世界中でブームを生んでいますが、ここには直接的、間接的な「セーラームーン」の影響があるでしょう。

ただもちろん「セーラームーン」がいつでも好意的に受け取られているわけでもありません。むしろ女性性が強調されており性差別的であるという批判もあります。「セーラームーン」が古典的要素によって構成されているということは、とりもなおさず保守的であるということでもあります。それは別に「セーラームーン」に限ったことではありませんが、どのような作品でも、とりわけ多くの人を魅了するヒット作品には常に保守的な部分と革新的な部分、古典的価値観と現代的価値観というふたつの要素が共存するものです。

それを直接描いているのが作者であることは間違いありませんが、しかし先にも書いたように、それを解釈するのは読者（鑑賞者）の自由であり、また責任です。「セーラームーン」を否定する人もいるだろうし、逆に重要なメッセージを読み取る人もいるでしょう。しかしそこで様々な解釈や評価が出てくるということが、名作の証だと言えるのではないでしょうか。

新たなる古典へ

この文章の中では繰り返し「セーラームーン」が古典からの影響や引用によって作られていることを指摘してきました。しかし最後にもうひとつ指摘しましょう。その「セーラームーン」自身がすでに「古典」に

なってしまっているということです。「文化史的な意味で大きな転換点を象徴する作品」と書いたのはそういう意味なのです。そしてもはや多くの人は良くも悪くも「セーラームーン」を古典として読まざるを得なくなっているということも付け加えておきたいと思います。

この文章は「セーラームーン」をまだ読んだことがない（もしくはアニメも見たことがない）という人にも少し配慮して書いてきましたが、実際には設定やストーリーの概略を知っている人が多いでしょう。もしこの作品がただその場で消費されるだけの作品だと思うなのならば、そういう人はあらためてこの作品を読むことはないはずです。考え方にもよりますが、今なら「セーラームーン」よりもずっと質の高いマンガやアニメを、雑誌や本やテレビ、ＤＶＤなどで毎日でも見ることが出来ます。それでも読んでみたくなる、読んでみたら面白いというのが古典なのです。

なぜ知っている話なのに面白いのか。いえ、そうではなくて知っているからこそ面白いのです。最近なぜか清涼飲料水や携帯電話などのテレビＣＭに「桃太郎」とか「かぐや姫」が使われることが増えました。いろいろな理由はあるのでしょうが、ひとつには誰もが知っている物語だからということがあると思います。知っているからこそ、そのキャラクターが登場しただけでその背景を思い浮かべることができます。だからＣＭ制作者にとっては余計な説明を省いて、そのイメージを膨らませていく、もしくは逆に裏切るという演出が可能となるのです。それが古典の強みです。十二月になると毎年毎年、飽きることなくどこかのテレビ局が「忠臣蔵」のドラマを作ります。映画や小説もいったいどれだけあるのか数えきれません。さらに言えば「○○○忠臣蔵」というような映画、ドラマ、小説もたくさんあります。誰もが知っている物語だからこそ、様々なアプローチが出来るということでしょう。

「セーラームーン」をいま読むということは、まさに自分の頭の中にある自分の「セーラームーン」の物語として読むということを意味します。たとえばそこ

で特定のあるキャラクターのシーンを読むことは、自分の頭の中にすでに住み着いてるそのキャラクターを生き返らせることなのです。そのシーンのそこには書いていないけれど、もしくは作品中には実は書かれていないけれど、あなたはそのキャラクターの性格や来歴を「知って」おり、それはつまりそのキャラクターがあなたの中で生きているということなのです。知っているからこそそのキャラクターは奥行きを持った生き生きとしたキャラクターに感じられるのです。古典はただ読まれるだけのものではありません。それは作品に自分の物語を付け加え、広げられた存在なのです。

　別の言い方をすれば、古典というのは大衆と時間によって作られる作品だとも言えるでしょう。もちろん最初に書いたのはひとりの作者だったかもしれません。しかしその作品が読み継がれるうちに多くの人々の「思い」が幾重にも重ねられていきます。そこに描かれている人物や物語には、あなたひとりのものだけではなく、すでに様々な時代の様々な人々のイメージが塗り重ねられ、深みを増した存在になっているのです。ぼくは新作のアニメ「美少女戦士セーラームーンＣｒｙｓｔａｌ」の第一回を見たとき感動を覚えました。おそらくそこに描かれていない背景の厚みまでも理解できたからです。それが古典の楽しさなのだと思います。

　もっと踏み込んで、そこに自分だけの物語を付け加え、広げてしまう人たちもいます。古典を新しい解釈で映画化することなどがその代表ですが、ある意味ではコミケの二次創作系同人誌もそうだと言えるかもしれません。ただの勝手な妄想じゃないのとも言う人もいるでしょうが……。「セーラームーン」には語られていない物語がたくさんあります。特に前世の物語はほとんど描かれていません。エンディミオン側近たちの物語、後の物語の中で各惑星のプリンセスだったことが明らかになるセーラー戦士たちの物語、前世のクイン・ベリルの物語、現世のセーラー戦士たちが覚醒するまでの物語などなど。こうした物語を自分の中で作ってみるのも古典の楽しみ方だと思いま

す。別にこのようなことはそれほど特別なことではなく、コナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」シリーズの中のいわゆる「書かれざる物語」を研究したり、自分で書いたりする人は世界中にたくさんいます。

なお最後にもうひとつだけ、古典と言っても生きている古典と死んでいる古典があるということを付け加えておきたいと思います。ただ古いから古典なのではないのです。人々が常に読んで（鑑賞して）そこに新しい時代の新しい価値観を塗り重ねていく限り古典は死にません。しかし誰も読まず忘れ去られた古典は、何かの拍子に再発見されるまでは意味を失います。死んだ古典になってしまうのです。古典というのは文化の継承と共有ですが、形だけ残っていてもそれは果たされないのです。

「セーラームーン」はこれまで「古典」として人々に読まれる度に再生してきましたが、これからも古典として生き続けられるかどうかは、読み手がどれほどこの作品の中から新しい発見を続けられるかにかかっています。もちろんそれは「セーラームーン」だけの問題ではなく、あらゆる創作作品に共通することです。そして重要なのはその発見をするのは、まさにあなたなのだということです。このことをぜひ心にとめておいていただけたらと思います。

（おわり）

第2版へのあとがき

団地で文芸部を立ち上げる話が出た時に、団地内図書室に関心を持ってもらいたい、また特に若い人たちにアピールしたい、さらに「本を読む」という行為は、実は様々な方法があり、複雑でありながら、かつ面白いということを伝えてみたいと思った。それで図書室内にあるマンガをネタに何か書くことにしたのだが、すぐにとても文集の誌面に収まらないことに気付いた。それで個人的に冊子にしてこの文章を公表し、文集「こばと」には短い書評を改めて書くことにした（第2号）。これがこの冊子のいきさつである。

さて、この文章を公表して以降、何人かの人と「セーラームーン」について話をする機会があった。その中で感じたのは、どの人も憶えているのはアニメ版の印象であり、むしろ「原作」コミックの方に違和感を覚えているということだ。実際、ぼく自身もそうだったのでそれはそうなのだと思う。

これは「セーラームーン」を現象として論じる場合、無視することの出来ない問題だ。本来であれば、コミックとアニメの関係性、アニメ自体の検討も必要になるだろうし、また、「セーラームーン・サーガ」と言うべき、メディアを越えたシリーズ全体を俯瞰した視点も必要になってくるだろう。しかし、それはとうていぼくの力量の範囲では無い。アニメを論じるとなると、製作者の範囲は非常に広範囲に広がることになるし、その反響、影響など、海外まで含めたらどう手を付けたら良いかさえ見当が付かない。

その意味では、この文章はとても中途半端な感想文でしかないのだが、そこはご容赦願うしか無い。もし、あなたにその気があるのなら、ぜひこの続きをあなた自身に書いていただきたい。

ぼくは三十代の前半にリアルタイムで「セーラームーン」のコミックとアニメに出会った。それは当時、人生のどん底とも言えるぼくにとって大きな癒やしになり、その後も一種の精神安定剤として手放せない作品であり続けている。そしてどうやら多くの人にとっても人生のエポックになった作品であるらしい。「セーラームーン」がこれからも古典として新たな進化を遂げていくことを願ってやまない。

著者・発行者
いまのまさし
（シラコバト団地ふれあい文庫文芸部所属）
発行
二〇一五年十二月二十日
二〇一七年十二月一日（第2版）